

## 図書 紹介

### 戦場の疫学

常石敬一著（神奈川大学経営学部） /

発売元：(株)鳴海社 / 〒101-0065 東京都千代田区西神田2-4-6 / 03-3234-3643 /

A判 / 224頁 / 価格1800円（税別） / 2005年11月8日発行

平成16年度の国内の食中毒発生件数は、厚生労働省の食中毒・食品監視関連情報によると1,666件、患者数28,175に達し、死者も5名発生している。件数は横バイ状態で推移しているが、1件あたりは大規模化傾向で、その大半は細菌性が占めている。その発生原因は、衛生知識の欠如と管理体制の不備である。衛生知識の欠如には、思い込み、偏見、無知、怠慢、疲労に加えて最近は「故意」即ちバイオテロも挙げられるようになってきた。米国では、FDAが03年10月9日にバイオテロ法に関連して食品施設登録と輸入事前通告に関わる暫定最終規則を発表し、同年12月12日までに特定食品11品目に対して登録を求めているように、バイオテロへの対策が進んでいる。

本書はその序章「バイオテロの早期発見には疫学が必要」から始まり、01年の米国での炭疽菌入り郵便物によるバイオテロ（生物兵器犯罪）事件とその解決に疫学による手法が効果を発揮したことを紹介している。疫学の定義は諸説あるが、その始まりはJohn Snow博士のコレラ研究にあるといわれている。疫学には「生物集団における病気の流行状態を研究する学問、即ち一時点／一時期での、ある集団において、その特定の病気が流行した場合、その流行の原因を調べ、その原因を除去することにより流行そのものを制御（終焉、予防）する学問である」という説がある。

本書の内容は次の9章からなり、浜松での集団食中毒と新京のペスト流行の2つの事例を時系列に紹介し、陸軍の某機関がその原因究明に乗り出し、疫学の方法を用いて調査と対処にあたり、それが「防疫研究」の名のもと生物兵器開発に繋がっていく構成になっている。

#### 序 章

バイオテロの早期発見には疫学が必要

第1章 浜松事件の概要

第2章 浜松菌確定後

第3章 新京ペストの概要

第4章 満州のペスト

第5章 新京出動

第6章 新京ペスト謀略説

第7章 ペストからノミの研究へ

終章 もうひとつの疫学

本稿では第1章の浜松事件の概要 - 「細菌中毒」という診断確定までと第2章の浜松菌確定後 - 菌特定後の調査体制について紹介する。事件は、1936年5月10日（日）、浜松第一中学校（現浜松北高等学校）で運動会が行われ、翌11日早朝から下痢をする生徒が続出し、患者は生徒の家族を含めて最終的に2250以上に上り、うち46人が死亡した。発生原因は、当日配られた大福餅であることは発生段階でほぼわかっていたが、その原因が病原体によるものか、腐敗によるものか、あるいは毒物の混入によるものかの見極めがつかなかった。原因が病原体で、ゲルトネル菌（サルモネラ菌）という当時あまり例のなかった細菌であることが判明し、それはどのように餅に付着したかの解明が課題となっていた。この解明には二つのルートがあり、ひとつは大福餅の原料である餅、餡、澱粉（浮粉）のどれに付いていたのか、もうひとつはどのようにして付いたか、すなわち人為的なのか、ネズミなどによるものか、予測不可能な事故によるものか、また何時頃に付いたか、どのようにして付いたかを膨大な資料をもとに整理し、時系列に詳細に記述している。また、この集団食中毒は当日陸軍でも発生したが、死者はでなかった。民間人と軍で被害の差をどう考えるかなど読み進めていくとつい引き込まれていく。疫学の読み物として興味深い。

今回から「新刊紹介」を「図書紹介」に改めた。読者から新刊書がタイミングよく掲載されないのご批判に応えたものであるが、新刊紹介には変わりはない。（学会事務局）